

豊公謡曲

豊國謡

シテ 豊太閤の靈

ツレ 明の臣下遊撃將軍

ツレ 同行唐人

ツレ 神主吉田兼見

ワキ 朝臣

狂言 社人

所 山城東山

時 春

「頼むかひある神心。く。治まれる時ぞ久しき。」

「抑是は当今に仕へ奉る臣下なり。さても東山豊国
の花。今を盛のよし君聞し召し及ばせ給ひ。花
見の行幸あるべき間急ぎ見て参れとの宣旨にまか
せ。唯今豊国に参詣仕り候。」

道行

「のどかなる日影と共に立ち出でゝ。く。大内山
の陰つゞく。梢もしげき松藤の。ふりにし跡を過
ぎ行きて。五条の橋を打ち渡り。豊国に早着きに

けり。く。

シテ一聲

「古への。誓ひの末の絶えやらで。又あらはるゝ宮
居かな。すぐに治めし世のためし。誰かおろかに
思はまし。」

サシ

「されば神功皇后は。仲哀天皇の御憤りを。散じ給
はん其ために。数万騎を催し給ひて。三韓に趣き
給ひしより。威光の程のあらはれて。光も高き日
の本の。国ゆたかなる御代とかや。」

下歌

「天が下静に守る明暮に。」

上歌

「年ふれば生ひ立ちにける緑子の。く。影は千年

の末までも。猶いやましに栄えよと。祈る心の疎なき。高き山深き海にも喻ふべき。親の恵は有難や。げにや老いせず死せずとの。其古事ぞ頼もしき。く。

ワキ詞

「如何に是なる人に申すべき事の候。」

シテ詞

「こなたの事にて候ふか何事にて候ふぞ。」

ワキ

「御身は当社の宮つこにて渡り候ふか。」

シテ

「さん候当社に故ある者にて候。」

ワキ詞

「見申せば美しき玉箒を持ち給ひ候ふは。如何なる謂れにて候ふぞ。」

シテ

「さん候此明神は花にふけり給ひ惜しませ給ふによ

り。かやうに一葉をもかき集めて候。」

ワキ

「是は勅使にて候ふが。当社の花盛のよし君聞し召され。行幸あるべき間見て参れとの勅諭にて。唯

「今はまで参りて候。

シテ

「さては勅使にて候ふぞや。有難や君としてだに当社の花を観覧あるべきとの御事なるに。都の外には住み候へども。朝夕此花に戯れ候ふ事。老が身の思出にてこそ候へ。けふも又桜に宿る狩衣。きっと馴れゆく春の山風。ふる事ながら思ひ出でられて候。

ワキカール

「不思議なりとよ老人は。たゞ人ならぬ御氣色なり。

まづく当社の御来歴。委しく語り給ふべし。

シテクリ

「抑此豊国大明神と申すは。本地八幡の御再誕にて。かりに和光の塵に交はり給ひ。東夷西戎南蛮北狄。御心のまゝに切り随へ給ひて。四海泰平なりし故に。今の代までも静なり。

サシ
「然るに此御神の。遷宮ならぬ御時は。

地
「太閤大相国秀吉公と申し奉りしが。種々の智略をめぐらし給ひて。都鄙安全に静まりて。先は津の

国大阪の辺に御座を定め。玉樓金殿軒を並べ。又は山城や。伏見の里の宮作り。

シテ
「金屋に花をかざり。

地
「昼夜の栄花は喻へもなし。ひとへに天下の誉れとかや。

クセ
「されば此君は。文武両道に疎からず。英雄の心

をとり。功ある物を賞祿し。志を衆に通ず。賊を討つて怨を報ずる事は。義の決なり。惻隱の心

は。仁の發なりと思し召して。土民を憐れみ給へ

ば。仮初の出御をも。唯日月の如くに。挾せぬ者

はなかりけり。金玉の台に。美玉の数をすゑおき。

御遊のみに送る世の。新玉の春の朝には。吉野醍

醐の花見にも。花やかなりし装ひを。今見るやうに思はるゝ。

シテ
「吹きすさび空の浮雲心せよ。

地
「花の盛の紅葉するまでと。連ね給ひし歌故に。曇

りし空も晴れ明り。吹く風も枝を鳴らさず。天も納受し。鬼神も感をなすとかや。我は豊国の神なるが。勅使に逢はん其為に。こゝに顕はれ出でたり。暫く待ち給へと。朱の玉垣に入り給ふ。玉垣の内に入り給ふ。

ワキ上歌
「夜もすがら花の木陰に枕して。／＼。猶も奇特を見るべしと。夢待ち顔の今宵かな。／＼。

唐人次第
「道の道たる時とてや。／＼。豊国の宮居あふがん。

詞
「かやうに候ふ者は唐大明の臣下。游擊將軍とは我事なり。さても日本國太閤大相國の武勇一天四海に隠れなきにより。度々御調物を備へ申して候。又此頃は豊國大明神とならせ給ひ。猶以て御威光あまねきよし承り候ふ間。宮居を拝み申さんために。只日本に趣き候。

道行
「東海の波路をしのぎ行く舟の。／＼。入日の影を跡に見て。月の出でくる雲間より。山見えそめて

日の本の。筑紫の地をも漕ぎ過ぎて。雁の翼の門司の関。巖島根や須磨明石。淡路島山程近き堺の浦に着きにけり。／＼。

下歌
「心とめなば何くにも。住吉の浜や難波江の。角ぐ
む蘆辺分け過ぎて。四方の梢も時めける。花の都
の東山。豊國の社を。拝むぞ尊かりける。／＼。
唐人ヅレ
「如何に神職の人の渡り候ふか。唐より游擊將軍の
御参りにて候。明神に供物の候御備へ候へ。

神主
「さん候某こそ神職の者にて候へ。御捧物の候はゞ
こなたへ給はり候へ。

唐人ヅレ
「是は夜光の玉とて楚王の持ち給ひし宝にて候。

神主カ、ル
「吉田の兼見承り。神前に参り宝珠を備へ。幣帛を
捧げつゝ。同じく祝詞を参らせければ。

地
「唐人も諸共に拝殿に。伺候して。伎楽をこそは奏
しけれ。

神主詞
「如何に游擊へ申し候。神前に於て一さし御舞ひ候

へ。

唐人「心得申し候。

地「不思議や舞楽の内よりも。く。光かゝやき異香薰じ。御殿しきりに鳴動するは。大明神の出現かや。

後ジテ

「抑是は人王百八代の御宇にありし。豊臣の神なり。我日域に地を占めて。君をあがめ民を憐れみ。四海たなごゝろに握り。心のまゝにありし事。唯こ

れ武勇の力ぞかし。よくく勅使も聞き給へ。

ロング地「あら貴の御事や。日の本を静にと。守りの神の御威光。御影を拝むあらたさよ。

シテ「代を直に治めしは。周の武王の始めより。惠王に至るまで。八百六十七年。

地「水よく舟を浮べて。君を守護し申さば。幾千代も変らじ。

シテ「上に居ておござれば。

地 「下として乱さず。

シテ 「げに仏法も王法も。動かぬ御代となる事も。和光のかげと思へたゞ。

地 「立つ波風も音せぬは。上下万民有難や。

シテ 「たゞ頼め。く。豊國の神のあらん限りは。君も安全に子孫も盛に。守るべしくと。宣ふ御声の下よりも。夜光の玉をば御門へさゝげ。正体を取り出だし。游撃に是を与へ給へば。大唐の北京に

宮居を建て。渴仰申さんと誓約を申し。日本大唐の。勅使は共に明神の。御影を挙し申して。御前を立てば。神は宮中に入らせ給ふ。く。威光の程こそ有難けれ。